

## 放送教材を活用した自分の思いを相手に伝える実践

兵庫県宝塚市立長尾小学校 教諭 熊原 加奈

### 特別支援 国語・自立活動 できたできたできた(家庭・社会生活)

#### 番組の特徴

小学校に入学したばかりの子どもたちが教室で騒いだり歩き回ったりして授業が成立しない、いわゆる「小1プロブレム」が課題になっている。「できたできたできた」は、1年生の不安を解消し、幼稚園・保育園から小学校へ、新しい生活のスタートをサポートする幼小連携番組である。

#### 授業デザイン

##### 1 番組視聴

第15回 もうすぐお正月  
視聴の姿勢は自由で、リラックスして見る。児童は、床に座っている場合もあれば、椅子に座っていることもある。番組視聴中にとりわけ声掛けはしない。



##### 2 お話タイム

「番組からわかったことがある人!」という発問から、番組から知り得た情報を自由に発表する。教師が児童の発言に付け加えて、質問したり、もう一人の児童に投げかけたりすることで、わかったことを伝えあう。

##### 3 ワークシートにまとめる

わかったことをワークシートに書く。形式はいつも同じで、番組の題を最初に書き、お話タイムでまとめた内容をA児はなぞり書き、B児は板書を写す。



##### 4 発表する・発表の様子を確認する

ワークシートを読んで発表する。その様子をタブレットで撮影。教師と児童と一緒に視聴する。



#### 研究の概要

日常生活の中で、知り得たことを正しく理解し、伝えることは大きな喜びだと考える。本実践では、国語科的要素も含め、話す・聞く・書く学習を行った。特別支援級での活用を考慮して、活動内容やワークシートがシンプルになることを重視した。放送教材を活用することで、わかったことを自分の言葉で発表する、伝えようとする力を楽しみながら身につけることができた。

#### 番組や関連動画クリップの活用意図

##### 番組活用で「わかった」を実感!

番組を使うことで、耳から入ってくる情報を視覚情報とともに理解することができる。支援学級の児童は、話したい、聞いてほしいという気持ちは沢山持っているが、日常生活の中では、「なんとなく」で反応したり、話したりすることが多い。番組活用を通して児童が「わかった!」という、嬉しい気持ちを実感できるようにした。

#### 授業デザインにかかわる教師の工夫

##### ファシリテーターとしての教師の存在

お話タイムでは、子どもたちの伝えたい思いを受け止められるよう、教師が発問したり、2名の児童の繋ぎ役となるようにしたりした。児童の発言に基づいて、番組中に行われていた雑巾を実際に使ってみる活動の再現を2度行った。

##### いつも同じ形式のワークシートを活用

ワークシートの形式はこれまでと変えなかった。繰り返し使っているものに書き込むことで、安心して取り組めるようにした。A児は、沢山の量をなぞり書きすることが難しい為、できるだけ文字数を減らし、書くようにした。

##### 見て振り返る活動

児童の発表はタブレットを使って動画撮影した。自分自身の頑張っている姿、発表している姿を目にすることで、思いを伝えられていることを確認できた。

#### 生き生きと学ぶ子どもの姿

##### 子どもの授業中の具体的な発言や姿

●動作化(雑巾がけ)につながった児童の発言  
A児は、発表するときに沢山ボディランゲージを使うことができる。「雑巾の使い方を発表したい!」と思っているときに、具体物を渡すと、とても上手に、挑戦し、番組と同様に板の目にそって雑巾がけをみせてくれる。B児もよく理解して、一緒にチャレンジすることができた。

##### 同僚の評価

●番組は視覚情報となり、具体的に理解しやすかった。また、機器を使うことが、学習意欲につながっていたように感じる。

#### 実践を終えて<行動宣言>

番組を活用することで、「わかった」ことを発表することができていた。ただ、子どもたちは、この授業で得た知識や力を日常生活で活用したり、応用したりするところまでは至っていない。実生活に結びつけるためには、応用的な活動や発問も必要であると感じた。ハードルが非常に高いかもしれないが、番組はそのハードルを越える力を持っていると感じる。引き続き、実践を続け、「わかった!」を「わかる」「できる」に変えていきたい。